

短期交換留学生の大学生活についての意識調査

—短期交換留学生は大学に何を求めているか—

長谷川 千 秋・奥 村 圭 子

要 旨

インタビューを通して山梨大学の交換留学生の留學生活の実態と留學中の意識の変化を明らかにし、よりよい交換留學へと發展すべく大学として必要なサポートを提言する。留學当初、留學目的に日本文化体験を挙げる声が多いが、留學生活を送る中で日本人学生との交流を求めるといふ内面の成長が見られる。その際チューター活動は親友の關係に發展し、日本人学生との交流の機縁となっているが、指導教員との關係構築にはなおサポートを要している。

キーワード：短期交換留學、受け入れ、指導教員、チューター、文化体験

1. はじめに

日本学生支援機構の「平成19年度外国人留學生在籍状況調査結果」（2007. 12）によれば、2007年5月1日現在、日本の大学および短大等に在籍する留學生数は118,498人（昨年比571人増）で、このうち短期留學生の数は8,368人（昨年比で945人増加）で過去最多となったということである。山梨大学では「短期交換留學生」がこの「短期留學生」に相当するが、短期交換留學生の受け入れが今年度は奇しくも過去最多の15名となった。本学ではこのように交換留學生数が小さいために、交換留學生の存在がキャンパスの中で埋没してしまい、学内のごく一部の人間との関わりしかもたないまま10ヶ月間の短期留學を終えているのではないかと、という懸念があった。そこで、本稿は本学の交換留學生がどのような意識をもって留學生活を送っているのか、また大学に何を求めているのかということ当該學生へのインタビューをもとに明らかにする。これにより大学として必要なサポートを提言していきたい。こうした問題について、すでに奥村・長谷川らは、2006年度学内プロジェクトとして、交換留學生全員を対象に留學生生活全般についてインタビュー形式による実態調査を行っている¹。調査では、交換留學生がキャンパスを中心に日本での異文化交流を経験し概ね充実した留學生生活を送っていることが判明したのであるが、調査時期が来日からほぼ8ヶ月程度が経過した時点であったため、来日当初の戸惑いや困難などが聞き出せず、「よい思い出」しか語られていないという印象をもった。そこで、本稿では、プロジェクトの調査項目をほぼ踏襲し、2007年4～5月に来日した交換留學生に対して、留學から2～3ヶ月経過した7月と、留學から7～8ヶ月経過した12月の計2回、インタビューを行うこととした。調査項目は2回とも同じ内容である。この方法で、交換留學生の留學生生活の実態を明らかにするとともに、留學期間中の意識の変化を分析したい。さらに、10月に来日した交換留學生についても調査の対象とし、来日後2～3ヶ月が経過した12

¹ 植屋清美・奥村圭子・滝口晴生・長谷川千秋「山梨大学における学部交換留學生の大学生活に関する調査・報告」（平成18年度戦略的プロジェクト教育関連プロジェクトA分野成果報告書）

月に調査を行い、サポートが必要な時期の様子を明らかにすることとする。

調査した項目は、調査票の順に、1) 出身大学名・出身大学での専攻・来日時期、2) 留学の目的・留学先に山梨大学を選んだ理由、3) 来日前の日本語の学習・来日後の日本語力・現在の日本語力、4) 生活費・アルバイト・経済状況、5) 食生活・健康状況、6) 前期(後期)の履修科目、7) 友だち、8) 旅行・大学の行事への参加、9) 困ったときの相談相手、10) 指導教員・チューター、11) 宿舎、12) 甲府市の感想、13) 山梨大学の感想と要望、で留学生生活全般に関わる。これにより、留学生が日本の大学に何を求めて留学しているのか、また実際に何を学び、どのような留学生生活を送っているのか、という実態を把握することができ、留学生のニーズに応じた教育環境や生活面でのサポート体制を整えることができよう。

以下には、調査方法および対象について述べた後、留学目的および生活に関する項目(2、4、7、8、10、13)について実態調査の結果を述べ考察する。勉学に関する項目(3、6)は本紀要の別稿²を参照されたい。

2. 調査方法および対象

調査方法は、学生1名に対して調査者2名(奥村・長谷川)があたるインタビュー形式による。前述の調査項目を記載した調査票を用意し、調査者が質問を読み上げ、学生から得た回答を調査票に記録した。録音はしていない。回答者と調査者の使用言語は、日本語が中心で適宜英語が用いられた。調査項目が多かったのと、リラックスした雰囲気作りを目指しての雑談や、互いの意図を確かめる質問を行ったこともあり、学生ひとりあたり、60分から90分程度のインタビューとなった。長いインタビューにも拘わらず、学生たちはみな早く調査に応じ、色々な話を聞かせてくれた。

調査時期は、前期に来日している学生については2007年7月と12月の2回、後期来日の学生については12月の1回である。

調査対象は、山梨大学の交換留学生15名で、来日時期の内訳は前期来日10名、後期来日5名である。出身大学および出身国別では、前期来日は、シドニー工科大学(オーストラリア)5名、イースタン・ケンタッキー大学(アメリカ合衆国)3名、ドレスデン工科大学(ドイツ)2名である。後期来日は、オックスフォード・ブルックス大学(イギリス)2名、リヨン第三大学(フランス)2名、ドレスデン工科大学(ドイツ)1名である。このうちオックスフォード・ブルックス大学とは今年度より交換留学がスタートしたばかりである。

15名の出身大学での専攻は、物理、遺伝子学、メディア・インフォーマティクス、コンピューター工学、ソフトウェア工学、都市計画工学、日本語、日本語・文学・文化、放送とコミュニケーション、映画、グラフィック・デザイン、法律学、ビジネス、会計学と多岐に亘っている。このうち日本語や日本文学など日本に関わる分野を主専攻とするのは2名で、二つの専攻のうちの一つが日本語や国際学(日本)である学生が7名である。残る6名は大学で選択科目として日本語を履修してきた学生である。

² 奥村圭子・長谷川千秋「短期交換留学生受入れのための態勢と学習環境の充実へ向けて—インタビュー調査をもとに—」

3. 留学の目的について

ここでは、調査項目のうち留学の目的について、調査票を示しつつ、前期に来日したグループと後期に来日したグループそれぞれについて結果を分析する。便宜上、前期に来日したグループをAグループ、後期に来日したグループをBグループと呼ぶ。

3.1 留学の目的

まず留学の目的について尋ねる。15人中3人は、日本への留学経験をもつ学生である。質問項目は、以下の調査票の通りである。

【調査票】Ⅱ. 山梨大学への留学について

1. 留学した理由は何ですか。また、留学の目的は何ですか。
2. 特に山梨大学に留学した理由はありますか。それは何ですか。

Q1「日本に留学した目的・理由」については、複数回答で下記の回答が得られた。グループによる有意差は認められないため一括して掲出する。

日本への興味や日本文化体験

※ () 内の数字は人数を示す

- 日本や日本文化への興味 11名 (内訳：日本や日本文化に興味があった(8)、日本の歴史が好き(1)、日本文化の授業が面白かった(1)、短期留学の経験があり日本に興味を持ち、また来たいと思った(1))
- 日本文化を学び、体験するため 8名 (日本の現代文化を直接学びたい(5)、日本について勉強したい(1)、日本と日本文化を直接見たかったから(1)、日本の食べ物・ことば・文化を体験したい(1))
- 日本で生活してみたい 3名 (日本の生活はとても異なっているので、実際に住んでみたいと思った(2)、日本でずっと暮らしたい(1))

日本語研修

- 日本語を学び、日本語を上達させるため 9名

専門分野や就職に興味

- 専門分野を学ぶため 2名 (都市計画(1)、ソフトウェア(1))
- 日本の企業に就職するため 1名 (日本のメディア企業または自国の日本企業(1))

その他

- コースのプログラムに留学が組み込まれている 3名
- よい休みをとりたかった 2名
- ひとの話を聞いて 2名 (授業で日本人は親切と聞いて(1)、日本に行ったことのある父から話を聞いて自分も行ってみたいと思った(1))
- 異文化体験のため 1名 (小さな頃外国にいったことがなかったから(1))
- 一人で生活してみたかった 1名

留学の動機は、大きくは「日本への興味や日本文化体験」「日本語研修」「専門分野や就職に興味」「その他」に分けることができる。回答の分布は、15名のうち13名が「日本への興味や日本文化体験」を動機としてあげており、そのうちの8名が「日本語」をも動機としてあげている。「日本への興味等」を動機にあげなかった学生は2名とも「日本語」と「専門分野や就職に興味」を動機としてあげている。なお、「専門分野や就職に興味」は3名が回答しているが、これは延べ人数で、1名は「就職」と「専門分野」に回答している。15人全員が「日本への興味や日本文化体験」「日本語」「専門分野や就職」と、日本に関わる項目のいずれかに回答しており、日本文化、日本語、日本の企業・技術への興味といった明確で積極的な理由をもって日本に留学していることがわかる。この「専門分野」の中身は「都市計画」と「ソフトウェア」で工学系の内容で、文系の分野名はあがっていない。日本学や日本文学を専攻してきた学生もいるのであるが、実際には（工学系の専門分野を回答した学生も含め）、多くの学生が、本学での授業が日本語で行われる関係で、専門分野をさらに研究するというよりは日本文化への見識を深めるといふ姿勢に傾いているように思われる。詳しくは、本稿の4節および別稿で述べる。

3.2 山梨大学を選んだ理由

次に、Q2「山梨大学を選んだ理由」（複数回答）は、おおよそ「山梨の環境や地理的条件」「大学の勉学環境や施設」「知人の薦め」「消極的な理由」に分類できる。

山梨の環境や地理的条件

- 田舎に住んでみたかった・自然が好きだから 4名（田舎に住んでみたかったから（2）、田舎と自然が好きだから（2））
- きれいで静かな町と聞いたから 2名
- 小さな町なので外国人が少なく日本語がうまくなると思った 2名
- 山梨の高校に留学したことがある 1名
- 家賃・物価が安いから 3名
- 東京に近いから 3名
- 東京で留学生活をしたことがあり東京以外の関東に住みたかった 1名

大学の勉学環境や施設等

- 専門分野を学ぶことができるので 3名（物理（1）、ワインや宝石（1）、コンピューターメディア（1））
- 1年間の留学プログラムがあったから 1名
- 留学プログラムが4月からスタートするので 1名
- 小さな大学だから 1名
- 奨学金をもらえる条件があったから 2名
- 宿舎に自分専用のバスルームがあったから 1名

知人の薦め

- 知人の薦め 3名（以前山梨大学に留学した学生の薦め（2）、山梨大学からの留学生の薦め（1））

消極的な理由によるもの

- 提携校は山梨大学だけ 2名
- 第二希望だったが来てよかった 1名
- 提携校の中で自分に合う難易度だったから 1名
- 提携校の中で締め切り日が早かった 1名
- 先生の選択だったが来てよかった 1名

「山梨の環境や地理的条件」では、「田舎や自然」4名、「静かな町」2名など山梨の自然環境に関する回答があった。「外国人が少なく日本語がうまくなると思った」2名という意欲的な声も聞かれた。また、「家賃・物価が安い」3名という経済面での生活のしやすさなどもあがっている。いずれも東京などの大都市圏での留學生活と本学でのそれとを比較した上で、環境面で生活しやすいという理由で本学を選んでいると考えられる。こうした判断ができるということは、申し込む際に地域に関する情報が手元にあったということである。事実、これらの回答をした学生は、山梨大学に交換留学をした学生が次年度の交換留学生の候補者に留學中のさまざまな情報を申し送るシステムがとられている大学からの留學生か、山梨に留學経験のある学生に限られていた。このことは、留學先で何を学ぶことができるのかという内容だけでなく、どのような留學生活を送ることができるかという内容についても、受け入れ校として公開しておく必要があるということだろう。

大学の勉學環境等が選択理由となったものとして、「専門分野」3名、「留學プログラムの条件」2名、「小さな大学」1名、「奨学金」1名、「宿舎」1名などがあった。「専門分野」と回答した学生1名から「他の提携大学は、専門分野のみのプログラムや、日本語のみのプログラムだった。山梨大学は、専門分野を学びながら日本語の勉強ができる点がいい」という声が聞かれた。

「知人の薦め」3名は、「山梨大学に交換留学した学生から話を聞いて」2名、「出身大学に山梨大学から交換留学生として来ている日本人学生から話を聞いて」1名という内訳で、すべて実際に山梨大学で学生生活を送った知人からの紹介である。知人の実体験に基づく薦めであり、安心して大学を選ぶことができるのだろう。

消極的な理由としては、「提携校は山梨大学だけ」2名と他の選択肢がないことや、「第二希望」「難易度が自分に合っていた」「(申請の)締め切り日が早い」といった声も聞かれた。ただし、「第二希望」「先生の選択」と答えた学生は結果的に「来てよかった」と答えている。「来てよかった」という感想があることは、今後、交換留学に関して本学からの情報発信を増やすことで消極的な理由を減らすことができると考える。

情報公開にはもうひとつ重要なメリットがある。インタビュー中、ひとりの学生から「来日前にいろいろと情報を集めていたので、来学期にしたいことがはっきりしている」という発言があった。この学生は、今学期日本語研修コースで日本語を中心に学んでいるが、日本語の運用力が向上したところで色々なことを始めたいと考えているそうである。事前の情報収集は短い留學生活を充実したものにする大切な準備となっていることがわかる。

4. 留学生活について

4.1 経済的な問題

現在の生活として経済・食生活・健康の面からインタビューを行ったが、良好な結果が得られた食生活・健康を割愛し、経済について述べることとする。

【調査票】Ⅲ. 現在の生活（経済・食生活・健康）について

1. 留学生活を送るためにはお金がかかりますが、あなたはどんなお金を遣って生活していますか。
(複数回答可) 両親からの送金 自国や自国政府の奨学金 (名) _____
 日本や日本政府の奨学金 (名) _____ 自分の貯金 アルバイト その他 _____
2. どんなアルバイトをしていますか。また、それは1週間に何日(何時間)くらいで、1ヶ月にいくらお金をもらえますか。
(1) 職種 _____ (2) 1週間に何日(何時間) _____ (3) 1ヶ月あたりの収入 _____
6. 日本(山梨県・甲府市)の物価は、予想していたよりも高いと思いますか。(5段階)
(1) とても高い (2) 少し高い (3) どちらともいえない (4) あまり高くない
(5) 全く高くない
7. あなたは自分の生活が経済的に苦しいと思いますか。(5段階)
(1) とても苦しい (2) 少し苦しい (3) どちらともいえない (4) あまり苦しくない
(5) 全く苦しくない

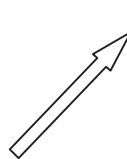
経済的な安定は、留学生活を順調に送るための条件のひとつといえる。そのような観点から、Q1「生活費の出所」、Q2「アルバイト」、Q6「物価」、Q7「経済状況」について質問を行った。それぞれの結果を以下の表に示す。表中、A1は、前期来日グループの1回目の回答、A2は前期来日グループの2回目の回答、Bは後期来日グループの回答である。

まず、Bの後期来日グループから分析する。Q1「生活費」は、「自国の奨学金」3名、「日本の奨学金(日本学生支援機構の短期留学推進制度奨学金)」1名、「その他(自国政府のstudent loan)」2名で、回答者の全員が、奨学金か政府のstudent loanを利用している。このうち1名は、「大学入学以降、両親からの経済的援助を受けないことにしている」とのことで、今回の留学生活も二種類の奨学金で生活している。他の4名はこれら奨学金等に、「両親からの送金」または「貯金」などを組み合わせて生活費に充てている。「アルバイト」は0名である。

Q6「物価」では、1名が「少し高い」と答えているが他は「あまり高くない」と答えている。

Q7「経済生活」は「あまり苦しくない」3名、「全く苦しくない」2名であった。以上の回答から、Bグループは深刻な経済的問題を抱えていないと判断される。

Q1 生活費	A1	A2	B
両親からの送金	6	5	3
自国の奨学金	4	5	3
日本の奨学金	0	0	1
自分の貯金	9	8	3
アルバイト	8	9	0
その他	0	0	2



Q2 アルバイト

Q2.1 種類	A1	A2
語学スクールの英語講師	5	5
英語のプライベートレッスン	2	2
工学部同窓会の英語講師	0	2
工学部英語コミュニケーションTA	0	3
ドイツ語講師	2	1
モデル	0	1

Q6 物価	A1	A2	B
とても高い	0	0	0
少し高い	3	2	1
どちらでもない	0	1	0
あまり高くない	5	3	4
全く高くない	2	4	0

Q2.2 時間（1週間）	A1	A2
1.5時間	4	0
2時間	3	4
3時間	0	3
3.5時間	1	2

Q7 経済生活	A1	A2	B
とても苦しい	0	0	0
少し苦しい	1	0	0
どちらでもない	1	0	0
あまり苦しくない	1	4	3
全く苦しくない	7	6	2

Q2.3 収入（1ヶ月）	A1	A2
10,000円未満	2	0
10,000円以上 15,000円未満	1	2
15,000円以上 20,000円未満	4	1
20,000円以上 25,000円未満	1	5
35,000円以上 40,000円未満	0	1

A1：前期来日グループ10人の回答（2～3ヶ月経過）、A2：同10人の回答（7～8ヶ月経過）
 B：後期来日グループ5人の回答（2～3ヶ月経過）

次に、Aの前期来日グループについて述べる。Q1「生活費」は、1回目で10人中8人の学生が「貯金」と「アルバイト」に加えて、「両親からの送金」または「自国の奨学金」のいずれかを遣って生活していた。残る2人は「アルバイト」をしていないが、Q7「経済生活」では2人とも「全く苦しくない」と回答している。この2名は2回目の調査でアルバイトを開始していた。

2回目の調査で他に見られた変化としては、「両親からの送金を中断した」「貯金とアルバイトに頼らなくなった」（1名ずつ）がある。送金を中断した理由は、後期になってアルバイトが増え必要がなくなったとのことである。貯金とアルバイトに頼らなくなったと答えた学生は、後期より学部の研究室で専門分野の研究活動を始めた学生で、「貯金はもともと旅行費用として使っただけなので研究が忙しい今は使う必要がなくなり、アルバイトも研究のためやめた」とのことである。

Q2「アルバイト」について。Aグループは前述の通り前期・後期のいずれかで全員が経験をしている。Q2.1「種類」は表に見られるように、1名が雑誌の読者モデルというユニークな経験をしている他は、英語やドイツ語の講師として使用言語や母語を活かしたアルバイトを行っている。これらの語学のアルバイトは大学関係者の紹介によるところが大きい。また、5名が出向いている語学スクールは毎年交換留学生を雇用してくださっており、交換留学生が行うほとんどのアルバイトが自分で探さなくてすむ仕組みになっている。学生にとってこれは大

変有利なことといえる。Q2.2「時間数」、Q2.3「収入」では、後期になって時間が増えた学生が4名おり、それによる増収が見られた。時間数は、おおむね後期で週に2～3.5時間、収入は後期で月に平均20,000円程度で、決して大きな数字とはいえない。

1回目のQ6「物価」およびQ7「経済生活」について述べる。物価を「少し高い」と感じる学生が3名いたが、それぞれQ7「経済生活」は「苦しい」「どちらとも言えない」「全く苦しくない」と回答している。「苦しい」と答えた学生がやや心配であったが、2回目では「あまり苦しくない」に変わった。説明を求めたところ「7ヶ月生活して慣れてきたので、あまり苦しいと思わなくなった」ということであった。ほぼAグループも経済状況は心配ないようである。

全般に、留学前に貯金をするなどして経済的な計画を立てた上で留学しており、留学中はできるだけ節約している様子が窺えた。こうした個々の準備や心がまえが経済生活に安定をもたらすのはもちろんのことだが、一方で交換留学生の全員が大学の留学生宿舎(単身者用月額5,900円)への入居を保証されていることも一因といえるだろう。

4.2 アルバイトの意義

【調査票】Ⅲ. 現在の生活(経済・食生活・健康)について

3. アルバイトはあなたの役に立っていると思いますか。(5段階)

- (1) 全く役に立たない (2) あまり役に立たない (3) どちらともいえない
(4) 少し役に立つ (5) とても役に立つ

4. (*「とても役に立つ」「少し役に立つ」と回答した人のみ) アルバイトはあなたにとってどんな役に立っていますか。

5. (*「全く役に立たない」「あまり役に立たない」と回答した人のみ) アルバイトはどのように役に立っていないと思いますか。

アルバイトを行っている学生(Aグループの学生1回目8名、2回目9名)に対して、アルバイトの意義を問う質問を行った。まず、Q3「アルバイトは役に立っているか」については、1回目では、「どちらともいえない」1名、「少し役に立つ」2名、「とても役に立つ」5名で、2回目では「少し役に立つ」3名、「とても役に立つ」6名であった。「役に立たない」というマイナスの評価をする学生はおらず、全般に2回目になると評価が高くなるのが特徴的である。

Q4「どんな役に立っているか」という問いには、下記のような回答が得られた。

経済的な助けや経験

- 経済的な助けになる 第1回目(6)、第2回目(6)
○ よい経験になる 第1回目(4)、第2回目(3)

日本人との交流

- 子どもに英語を教えたり、遊んだりするのが楽しい 第1回目(1)、第2回目(1)
○ 日本人と友達になり、交流できる 第1回目(1)、第2回目(1)

- 色々な年齢層の日本人に接することができる 第1回目 (1)、第2回目 (2)
- 色々な年齢層の人の内面を見ることができる 第1回目 (0)、第2回目 (1)
- 日本文化を見ることができる 第1回目 (0)、第2回目 (1)

日本語の勉強になる

- 日本語を話す機会になっている 第1回目 (0)、第2回目 (1)
- 説明を日本語でするなど、日本語の勉強になる 第1回目 (0)、第2回目 (2)
- 学生から日本語について色々学ぶことができる 第1回目 (0)、第2回目 (1)

教え方への興味

- 年齢層によって色々な教え方があることを学んだ 第1回目 (0)、第2回目 (1)

上記の通り、1回目の調査では「経済的な助け」と「よい経験になる」の回答が多く、日本人との交流に関わる回答は3名のみであった。2回目では、1回目同様「経済的な助け」は多いものの、「日本人との交流」や「日本語の勉強になる」などの回答が増え、「よい経験」の中身を具体的に話すようになった点が大きな変化といえる。

この「日本語の勉強になる」とは日本語を媒介として授業を行うことによるものである。後期になって日本語のコミュニケーション能力が向上してきた結果、日本語による教室活動が上達したのであろう。交換留学生にとって、大学の日本語の授業でなかったことを実際に試してみるよい機会になったと考えられる。それだけでなく、教室活動で日本語を使うことがまた学びに繋がり、さらには日本人学生との交流が増えるという相乗効果が得られたものと推測する。こうした意義が実感された結果、2回目では具体的な回答が出てきたものであろう。この日本人との交流や日本語の勉強は、前述の「留学の目的」に「日本への興味や日本文化体験」や「日本語研修」があったこととちょうど一致しており、交換留学生にとってアルバイトは大変意義深い活動といえる。今後は、まだアルバイトをしていないBグループの学生たちもアルバイトの機会をもつべきであろう。

4. 3 交友

次に、留学生生活を交友という面から分析する。Q1「学内の日本人」、Q2「学外の日本人」、Q3「学内の留学生に友人」がいるかどうかを尋ねた。

【調査票】V. あなたの交友について

1. 山梨大学に日本人の友人がいますか 3人以上いる 1～2人いる いない
2. 山梨大学の学生以外の日本人の友人がいますか 3人以上いる 1～2人いる いない
3. 山梨大学の留学生に友人がいますか 3人以上いる 1～2人いる いない

Q1 日本人(学内)	A1	A2	B
3人以上	8	10	5
1～2人	2	0	0
いない	0	0	0

結果は表の通りである。「友人」の定義には文化の差や個人差があり、答えにくそうにする学生もみられた。

Q1「学内の日本人の友人」については、Aのグループで1回目の調査で「1～2人」とやや少ない人数を答えた学生が2名いたが、2回目には全員が「3人以上」と回答している。Bグループは全員「3人以上」である。日本人学生の友人を作る工夫として、提携校のひとつでは、交換留学生の間で次期の交換留学生へ自分の友人を紹介する「友人の引き継ぎ」が行われているとのことである。この仕組みは是非他の提携校でも導入してほしいところである。

Q2 日本人(学外)	A1	A2	B
3人以上	4	5	4
1～2人	3	4	0
いない	3	1	1

Q2「学外の日本人の友人」については、全体にQ1よりは人数が少なめで、「いない」という回答もAグループで1回目3人、2回目1人、Bグループで1人みられる。ただAのグループで、1回目と2回目の調査を比較すると、1回目よりは2回目の方が友人の数が

増える傾向にある。1回目に「いない」と答えた学生3人も全員が2回目では友人を作っていた。唯一2回目に「いない」と回答した学生は、「サークルに入り学内での友人が増えたため、学外の友人とは会う機会が減ってしまった」とのことで、特に問題はないようである。

Q3 留学生(学内)	A1	A2	B
3人以上	7	8	5
1～2人	2	1	0
いない	1	1	0

Q3「学内の留学生」については、Aグループの7名（1回目による、2回目は8名）とBグループの全員が「3名以上」と回答しており、留学生の友人をもつ学生が多いことがわかる。ただし、15人の交換留学生のうち14人が同じ留学生宿舎で生活しており、その

うち10人ほどは交換留学生同士で共同キッチンで毎日の夕食を一緒に作ったり、旅行をしたりするなど、行動を共にすることが多い。その行動を共にしているグループが「3名以上」と回答している。この数字の偏りからは、他の文化圏の留学生との交流が希薄であるということが見えてこよう。同じ宿舎には他の文化圏の留学生も大勢生活しているが、欧米文化圏の交換留学生同士で固まっているのは残念なことである。

4. 4 旅行

次に、留学期間中の個人的な旅行について纏める。調査票ではこの項目の後「大学の行事への参加」、「困ったときの相談相手」について尋ねているがこれを割愛する。行事には都合がつく限り積極的に参加しており、また困ったことについては全員がまだ起きていないという回答であった。

【調査票】VI. 旅行

1. 留学してから現在までにどこかに旅行しましたか。 はい いいえ
2. (*「はい」と答えた人のみ) それはどこですか。
 (1) 海外_____ (2) 県外_____ (3) 県内_____

旅行では、Q1「留学してからの旅行経験」とQ2「行き先」の海外と県外について述べておきたい。Q1は、Aのグループで、1回目では「はい」8名、「いいえ」2名であったが、2回

目では全員が「はい」と回答した。Bのグループでは、「はい」4名、「いいえ」1名であった。Q2「行き先」を含め旅行はかなり個人差がみられた。詳しく見るため、以下に「行き先」を個人ごとに示す。

Aのグループ

a. 1回目 (なし)	2回目 (東京、横浜)
b. 1回目 (なし)	2回目 (千葉、東京、横浜)
c. 1回目 (静岡)	2回目 (千葉、東京)
d. 1回目 (東京、静岡、長野)	2回目 (静岡、長野、京都、大阪、広島、福岡、 宮崎、長崎)
e. 1回目 (東京)	2回目 (仙台、日光、鎌倉、京都、奈良)
f. 1回目 (大阪、京都、奈良、福岡、鹿児島)	2回目 (仙台、日光、東京、京都、沖縄)
g. 1回目 (大阪、京都、奈良、福岡、鹿児島)	2回目 (東京、高山、大阪)
h. 1回目 (大阪、京都、奈良、福岡、鹿児島)	2回目 (香港、東京、京都、大阪、広島)
i. 1回目 (大阪、京都、奈良、福岡、鹿児島)	2回目 (韓国、東京、横浜、京都、大阪、広島、 高山)
j. 1回目 (大阪、京都、奈良、福岡、鹿児島)	2回目 (仙台、日光、高山、京都)

Bのグループ

- k. 東京、静岡
 - l. 東京、静岡、名古屋、京都、大阪
 - m. 日光、東京、静岡
 - n. 東京
 - o. なし
-

個人差の要因の一つとして、1回目のインタビューは夏休み前の7月、2回目はBグループとともに冬休み前の12月に行ったことが関係しているようである。大きな旅行のチャンスはゴールデンウィーク、夏休み、11月の連休に限られてしまうため、10月に来日したBのグループはAのグループに比べ、大きな旅行が少なくなっている。Aグループのうち学生a～cは1回目の旅行経験が僅少であるが、この学生たちは5月中旬に来日しておりゴールデンウィークを経験していない。ただし、学生a～cは2回目の調査でも山梨から比較的近い東京などの関東に限られており、来日時期以外の理由もありそうである。

他の要因として経済的な理由、興味の問題などがそれとして考えられるわけだが、ここでは1回目によく旅行をしている学生f～jに注目して、それ以外の要因を考えてみたい。f～jは1回目の調査で「大阪、京都、奈良、福岡、鹿児島」と回答しているが、このメンバーでゴールデンウィークを利用して一度にこれだけの旅行をしたそうである。一方、学生f～jと同じ時期に来日した学生d、eはこの旅行に参加していない。f～jとd、eは出身大学が別である。ただしf～jは留学前互いにほとんど面識がなかったそうである。したがって面識の有無ということは直接しない。結局f～jがd、eと異なるのは、前年度の交換留学生から情報

の引き継ぎが行われている大学の出身者という点である。4月初めに来日したばかりの留学生にとって1ヶ月後のゴールデンウィークまでに大きな旅行の準備をするのはなかなか難しいことではないだろうか。それを決行できるかは、来日前の情報収集の功績が大きいものと思われる。情報が十分に得られていれば煩瑣な予約の手続きへの心づもりだけでなく、経済的な準備も可能であろうし旅先への興味もわいてくるだろう。1回目のf～jの行動の背景には以上のことが推測される。その後、学生d、eは2回目の調査で分かるように活発な行動を見せている。これらの学生にとって旅行は「留学目的」で述べていた「文化体験」の一環なのであろう。全体としてみれば、「文化体験」の一環とはいえ、休日を利用してこれほど多くの場所を訪れている学生がいることは驚きである。

5. 大学との関わり方について

この節では、交換留学生が大学とどのような関わりをもっているかを明らかにするため、指導教員やチューターとの関係、山梨大学の感想や要望についての回答を分析する。

5.1 指導教員との関係

本学では、交換留学生には学部の指導教員と学生チューターがつき、留学期間中の様々なサポートにあたっている。指導教員の選出は、交換留学生の出身大学での専門分野にあわせて行われているのだが、別稿で示されるように、専門の授業よりも日本語の授業を中心に受講する学生が多く、指導教員との日常的な接点が少なくなりがちである。そこで、指導教員との関係が良好に築かれているかどうかを以下の質問によって尋ねた。

【調査票】XI. 指導教員やチューターとの関係について

1. 指導教員の先生と時々会っていますか。
はい いいえ どれぐらいの頻度ですか_____
2. (*「いいえ」と答えた人のみ) 会わないのはなぜですか。
3. 指導教員の先生からどんなサポートを受けていると思いますか。
特にない 色々なアドバイスをもらう 日本語を教えてもらう
悩み事や心配事を聞いてもらう 一緒に食事をする その他_____
4. 指導教員の先生に何か要望がありますか。

Q1「指導教員と会っているか」という問いでは、Bのグループでは全員が「はい」で、定期的に会っている学生が多いが、Aのグループでは1回目では「はい」が5名、2回目では3名とやや少なく、二つのグループには差が見られた。特に気になるのが、Aのグループで「今までに0回」つまり一度も会っていないと答えた学生が、1回目で2名、2回目で3名もいることである。1回目に「0回」の2名の学生は、2回目でも「0回」と答えており、何らかの対処が必要である。以下Q1～3はAのグループとBのグループを分けて考察する。

まず、Aのグループの1回目と2回目を比較すると、「はい」のうち「1週間に1回」「2週間に1回」という頻度で定期的に会っていた学生はどちらの回も3名で数の上では変わらない。

Q1 頻度	A1	A2	B
はい	5	3	5
今までに2回	1	0	0
今までに3回	0	0	1
今までに4回	1	0	0
2週間に1回	1	1	2
1週間に1回	2	2	1
最近減っている	0	0	1
いいえ	5	7	0
今までに0回	2	3	0
今までに1回	3	2	0
今までに2回	0	1	0
最近減っている	0	1	0

しかし、学生の異同があり、両回とも変わらず定期的に会っていたのは2名で、1名は1回目で定期的であったのが2回目は「いいえ」に転じ、1名はその逆という変化がみられた。また別の動きとして、1回目でQ1が「はい」だが定期的には会っていなかった学生が2名いたが、この2名は2回目で「いいえ」に転じていた。一方、「いいえ」と答えている学生の頻度を二つの回で比べると、表に示されるように、2回目の方で会う回数が減少している。以上のことを纏めると、Aグループでは最初から定期的に会っている学生は2回目の調査でも会っているが、そうでない学生は2回目の調査で会う回数が減り、両者の間に差が生じている

という傾向にある。

この差を分析するために、Q1で「いいえ」と答えた学生に、Q2「その理由」を尋ねたところ、最も多いのは「問題がないから」（1回目3人、2回目1人）ということであった。困ったことがないのは望ましいことだが、指導教員の役割を理解していないといえる回答でもある。他、「特に理由がない」（2回目1人）、「チューターが解決してくれる」（2回目1人）、「私が忙しいから」（1回目1人、2回目1人）、「自分の大学にも指導教員がいるが、科目や授業のことを聞く程度でそんなに頻繁に話さない」（2回目1人）、「指導教員の授業をとっていないので会う理由がない」（2回目1人）、「互いに連絡をとっていない」（1回目1人）など、指導教員の必要性を理解していなかったり、指導教員は授業でのみ接点があると捉えているようである。またそれとは別に、「何かあったらいつでも来なさいと言われていたが、忙しそうで邪魔になりたくないと思っている」（2回目1人）、「メールを書いたが返事がなかった」（2回目2人）、「研究室に行ってみたが会えなかった」（1回目1人）などは、指導教員の多忙が原因であろうか。

さらに分析を進めるために、調査票に用意していない問いであるが、Aグループで「定期的に会っている」と答えた学生にその理由を尋ねてみた。すると二度とも定期的に会うことを続けていた学生は、「指導教員のゼミに参加しているため、1～2週間に1回は必ず会っている」ということであった。1回目のみ定期的に会っていると答えた学生は、指導教員の配慮で、学生用の研究室に他のゼミ生と同様に専用の机を用意してもらったとのことである。なおこの学生がQ2で「忙しそうで邪魔になりたくないと思っている」と回答している。2回目のみ定期的に会っていると答えた学生は、前期は日本語の授業を中心に受講していたが、後期より指導教員とは別の学部の研究室で実験を行うようになった学生で、「実験をはじめたことから指導教員に頻繁に会いアドバイスをもらうようになった」ということである。このように、Aグループでは、定期的に指導教員と会っている学生は、専門分野での指導を受けることで関わりを密にもっているのである。

Q3「指導教員から受けているサポート」も、その関係性の粗密に応じた結果となった。Q3

Q3 サポート	A1	A2	B
特にない	5	4	1
色々なアドバイス	2	1	3
日本語の指導	1	1	0
悩みや心配の相談	1	0	0
一緒に食事	1	1	5
その他	3	7	2

「指導教員から受けているサポート」の結果を左の表に示す。表のA1、A2で、サポートが「特にない」と回答した学生は、いずれもQ1で「いいえ」と答えた学生であり、「色々なアドバイス」、「日本語」、「相談」、「食事」と具体的な選択肢の中からサポート内容を答えた学生はすべてQ1で「はい」と答えた学生であった。

A1その他

○英語で話す(1)、○研究室で雑談(1)、○ゼミに出席(2)、○アルバイトの申請(1)

A2その他

○研究室で雑談(1)、ゼミに出席(2)、○実験のアドバイス(1)、
○履修申告届けに印をもらう(4)、○長期旅行の許可をもらう(1)、○アルバイトの申請(1)

Bその他

○ゼミに出席(1)、○英語のサポートを受けられる専門の授業を紹介してもらう(1)、
○映画鑑賞(1)、○アパートの保証人になってもらう(1)

「その他」では、「はい」と答えた学生は、A1「英語で話す」や「研究室で雑談」などであるのに対し、「いいえ」と答えた学生は、「アルバイトの申請」などの手続きが回答にあがった。専門分野の指導で指導教員と会っている学生は、その交流を通じて、専門分野以外でも指導教員と交流をもっているが、会っていない学生はそのような機会をもたないまま極めて形式的な関係となっているということであろう。A1で「英語で話す」と答えた学生は、指導教員の授業に出席するなどの専門分野での交流は行っておらず、Q1の2回目は「いいえ」と頻りに会わなくなっている。

交換留学生が指導教員の授業に出席するためには、高度な日本語運用能力を要するか、担当教員による英語の補助が必要となる。実際、Aグループでゼミに出席した学生は、比較的日本語力が高い学生であった。学部教員の間には他の学生への教育効果の低下を心配する声もあり、非常に難しい問題である。この障壁をどうするかが今後の課題となろう。

次に、Bのグループの指導教員との関係をみる。このグループの回答は大変興味深い。Q1「指導教員と会っているか」は5名全員が「はい」と回答しているが、ゼミに出席している学生は僅か1名である。そのかわり、Q3「サポート内容」にあるように全員が「食事」と回答していた。本稿では、「食事」を経済的なサポートとして考えるのではなく、食事をともにすることで色々な対話ができるようになったり、学生が気軽に助言を仰ぎきっかけづくりになるといったラポール形成の場と位置づけている。「その他」では、「映画鑑賞」という回答も見られた。これは、指導教員と一緒に映画鑑賞クラブを作り、交換留学生や日本人学生などが鑑賞会に参加し、担当者が選んできた映画を上映して意見交換をする会だという。このように、Bグループでは、授業や研究交流を介さなくとも良好な関係が築かれていることがわかる。これは、指導教員の先生方が多忙を厭わず学生との交流の場を用意されていることで成り立っているものである。指導教員とのこのような交流を通して、学生の留学目的の「日本文化体験」に

触れることがあるだろう。学生が探し求めて体験するのはまた別の次元の学びが得られるはずで、学生にとって大変貴重な経験であると推測する。留学生センターとしては、こうした生きた交流を提言していきたいものである。

Q4「指導教員への要望」では、Bグループは全員が「なし」であった。Aグループでは指導教員と会っていない学生から、「英語のアルバイトを紹介してほしい」、「奨学金について案内してほしい」といった皮肉もとれる回答や、「一度会いたい」、「メールの返事がほしい」といった切実な声が聞かれた。逆に、頻繁に会っている学生からは、「来年度も新しい交換留学生の指導教員になってほしい」、「すばらしい」という声が聞かれた。指導教員と交換留学生の関係を作るために、両者に指導教員のあり方を明確に伝えていくことは、われわれ留学生センターの責務である。

5. 2 チューターとの関係

次に学生チューターとの関係についてみる。学生チューターは、指導教員のゼミか同じ講座の日本人学生の中から、指導教員が選出するシステムが取られている。

【調査票】Ⅹ. 指導教員やチューターとの関係について

5. チューターと時々会っていますか。 はい いいえ どれぐらいの頻度ですか _____
6. (*「いいえ」と答えた人のみ) 会わないのはなぜですか。
7. チューターからどんなサポートを受けていると思いますか。
特にない 色々なアドバイスをもらう 日本語を教えてもらう
悩み事や心配事を聞いてもらう 一緒に食事をする その他 _____
8. チューターに何か要望がありますか。

Q1 頻度	A1	A2	B
はい	9	8	4
今までに2回	0	1	0
1ヶ月に1回	0	1	0
2週間に1回	3	2	0
1週間に1回	3	3	2
1週間に2回	1	1	2
1週間に3回	2	0	0
いいえ	1	2	1
今までに0回	0	1	0
今までに1回	1	1	0
今までに3回	0	0	1

A、B両グループともQ1「はい」と答えた学生がほとんどで、頻度をみても、1～2週間に1回以上会っている学生が多い。指導教員とは頻繁に会っていなかった学生も、チューターとはよく会っているようである。Aグループにも大きな変化はなかった。唯一大きな変化を見せた学生は、1回目で「2週間に1回」であったのが2回目で「今までに2回」に減っていた。その理由を尋ねたところ「他の日本人学生と会うので、機会が減った」ということであった。この学生は、後期からサークルに入り、日本人学生との交流が増え大変満足しているとのことである。

「いいえ」と答えた学生にQ2「理由」を尋ねると、「問題がないから」2名、「チューターは仕事として会っていて、義務的な感じがする、他に日本人の友達がいるので大丈夫」1名、「交換留学で自分の大学に来ていた日本人学生とよく会っているから」1名ということであっ

た。他にしばしば会う日本人学生のいる留学生はともかく、「問題がない」と答えたうちの1名は4.3「交友」で日本人学生の数が「1～2人」と少なかった学生である。この学生は決まった留学生とばかり話しており、折角の異文化交流の機会を逃しているように思えてならない。

Q3 サポート	A1	A2	B
特にない	0	1	0
色々なアドバイス	6	4	4
日本語の指導	6	6	2
悩みや心配の相談	1	0	1
一緒に食事	8	6	3
その他	6	5	5

A1その他

- 色々なおしゃべり (2)、○来日直後の各種手続き (2)
- レポート作成 (2)、○履修する科目の選択 (2)
- ドライブ (1)、○買い物や映画 (1)
- 病院のこと (1)、○切符の買い方 (1)

A2その他

- 色々なおしゃべり (1)、○履修する科目の選択 (1)、○国際便の荷物の送り方 (1)
- 銀行でのトラブル (1)、○ホテルの予約 (1)

Bその他

- 来日直後の各種手続き (2)、○履修する科目の選択 (2)、○引っ越したときの買い物 (1)
- 日本語と英語の会話クラブ (1)

Q3「サポート」について尋ねたところ、「色々なアドバイス」や「日本語の指導」、「食事」またその他においても「色々なおしゃべり」から「履修選択」、「来日直後の手続き」など、指導教員に比べて同世代の日常生活のアドバイザーとして気軽にサポートを受けていた。

Q4「要望」では、Aグループでは両回とも5名が「なし」、Bグループでは全員が「なし」であった。具体的な要望としては、「会話練習をしたいのもっと会いたい」（1回目1人、2回目1人）というように日本語のパートナーとして会う頻度を求めるものと、「もっと一緒に楽しく遊びたい」（1回目1人、2回目3人）というように友達として会う頻度を求める声に分かれた。2回目になると友達としてチューターと会う頻度を求める声の方が多くなっている。このことは、初対面の来日当初は大学が引き合わせたパートナーという関係であったのが、チューター活動を続けることで友達の関係にまで深まったということだろう。留学生にとって何よりの経験になっていることと思われる。

5.3 山梨大学の印象・要望

山梨大学に留学してよかったこと、反対によくなかったこと、さらに大学への要望を尋ねた。

【調査票】XI. 山梨大学の印象、要望

3. 山梨大学に留学してよかったと思っっていることはありますか。それはどんなことですか。
4. 山梨大学に留学して、よくなかったことや困ったことがありましたか。それはどんなことですか。
5. 山梨大学や教員に対して何か要望がありますか。

Q3「よかったこと」についてグループ毎の回答を以下に示す。一覧のうちAのグループで

波線を施した回答は、1回目にもみ聞かれた回答と、2回目にもみ聞かれた回答であることを示す。まず、Aのグループでの1回目と2回目の回答の相違からみたい。1回目では、「小さな大学」、「興味のある学科がある」など山梨大学の特徴を捉えた感想や、「周囲の人が親切」という他者から受けた厚意に関する感想が多い。2回目では、1回目と同様の感想が聞かれる中にも、「センターの行事が面白い」や「サークルに入った」など行事やクラブ活動への参加に関する感想がみられるようになり、さらに「よい友達ができた」、「色々な日本人に出会えた」など日本人との交流が感想の中に盛り込まれてくるようになっている。「日本語の上達」を挙げる声も注目すべきである。つまり、来日当初は「来訪者」として山梨大学を外側から捉えているのに対し、留学生活を送る間に次第に行動範囲が広がることで学内の人間との交流が深まっていき、8ヶ月後にはその体験したことを語るができるように意識が変わってきていることがわかる。ただ、中には「同じ大学の交換留学生在がみんないい人でよかった」と、交換留学生との人間関係に注意が向いている学生もいる。

Bグループは、5.1「指導教員との関係」で指導教員から手厚いサポートを受けている学生が多いことが判明したように、「大学が自分を放っておかない感じで、いつも大学と関わっている気がする」、「家族のように親しく教授たちと話せること」といったAのグループにはない感想が聞かれた。ただ、Aの2回目にあるような「よい友達ができた」、「色々な日本人に出会えたこと」といった異文化間の人間関係の構築といった深い感想を聞くことができず、「チューターシステムがよく、毎日の助けになった」というようなチューターによるサポートというレベルにとどまっているのは注目すべきである。同世代の人間関係においては、Aグループの1回目とほぼ同じ状態にあるということである。このことは、短期留学において充足した人間関係の構築に必要な時間ということにひとつの見方を示したということになるだろうか。半年後、BグループがAグループのような人間関係への言及ができるようになることを期待したい。

A 1 よかったこと

- 小さな大学 (1)、 大学のサポートがよい (1)
- 先生方や学生など周囲の人が親切 (3)、 色々な人が助けてくれ、誰にでも助けをもとめられる (2)、 先生方がやさしい (1)、 先生方がよい (1)
- 雰囲気が好き、慣れやすい (1)、 ライフスタイルがリラックスしている (2)
- クラブ活動が面白く、とても面白い人に出会える (1)
- 授業が興味深い (2)、 自分にとって興味のある学科があること (1)
- 建物が新しくきれい (1)、 大学と会館の距離が近い (1)、 学食が便利でおいしい (2)
- 車が少なくて町が静か (1)、 家賃・物価が安い (1)
- 新しい経験になった (1)

A 2 よかったこと

- 大学のサポートがよい (1)、 留学生センターの行事が面白かった (1)
- 先生方や学生など周囲の人が親切 (3)、 色々な人が助けてくれ、誰にでも助けをもとめられる (2)、 先生方がよく助けてくれる (2)、 先生方がやさしい (1)

短期交換留学生の大学生活についての意識調査

- チューターシステムがよい(1)
- 雰囲気が好き、慣れやすい(1)、○小さな大学で知り合いが増えてくると親しみを感じるようになる(1)
- よい友達ができた(1)、○色々な日本人に出会えたこと(1)、○同じ大学の交換留学生がみんないい人でよかった(1)、○サークルに入ったことがよかった(1)
- 日本語が上達した(1)、○日本人と日本語で話せるようになったこと(1)
- 授業が興味深い(1)、○研究室に入って研究できたこと(1)
- 建物が新しくきれい(1)、○大学と会館の距離が近い(2)
- 町全体がよい(1)、○家賃・物価が安い(2)
- もう一度山梨大学に来たい(1)

Bよかったこと

- 大学のサポートがよい(1)、○自国の大学と違うところに驚いた、日本の大学は勉強するだけでなく楽しい(1)
- 周囲の日本人がとても親切だ(1)
- チューターシステムがよく、毎日の生活の助けになった(1)
- 大学が自分を放っておかない感じで、いつも大学と関わっている気がする(1)、○フレンドリーだ(1)、
 - 家族のように親しく教授たちと話せること(1)
- 授業の雰囲気がよい(1)
- 建物が新しい、きれい(2)、○図書館がよい(1)、○学食が便利でおいしい(1)、○coopがよい(1)
- 自然・温泉が近くにある(1)、○家賃が安い(1)、○東京に近い(1)、○富士山がとてもきれい(1)
- 一番よい場所に来たと思っている(1)

次に、Q4「よくなかったことや困ったこと」について検討する。Q3に比べ意見は多くない。約半数の学生が「特にない」と回答する（A1で1名、A2で4名、Bで4名）一方で、下記のような具体的な問題が指摘された。A1の「学生とのトラブル」についてはインタビュー後に対処し解決済みである。当事者の学生とは授業で日常的に顔を合わせているのだが、やや微妙な問題であり事態が深刻化する前に聞き出せたのはインタビューの思わぬメリットであった。A1の「日本人学生がシャイで打ち解けてくれない」と言っていた学生に2回目の調査でその後の様子を尋ねたところ、「自分から積極的に話し続けることで相手も慣れてきた、今は問題ない」とのことであった。親しくなるためには相手の出方を待つだけでなく、この学生のように自分から積極的に交流を求めていく姿勢も必要であろう。A1の「英語の授業がない」とは専門分野の授業を英語で学びたいということであり、何らかの改善策が求められる。

A1よくなかったこと、困ったこと

- 他の留学生と友達の間にトラブルが起きていること(1)
- 日本人学生がシャイで打ち解けてくれない(1)
- 日本語の授業に閉じこめられている感じがする(1)、○英語による授業がない(1)

- 夜道が暗い(1)、○友達や家族と会いたい(1)、○食物の違い(1)
- 宿舎のルールが厳しすぎる(1)
- エアコンのない教室が多い(1)、○教室の掃除が行き届いていない(1)

A 2 よくなかったこと、困ったこと

- 授業内容がやさしい(1)、○学食のメニューがいつも同じ(1)

B よくなかったこと、困ったこと

- ~~○宿舎のルールが厳しすぎる(1)、○トレーニングルームを自由に使えないこと(1)~~

Q5 「山梨大学への要望」を以下にまとめる。Q4と同様多くはないが、A1 A2 「宿舎は留学生だけが生活するのではなく日本人と混在にしてほしい」、A2 「留学生と日本人が話す機会がほしい」、「日本人との旅行」など、さらなる交流を求める声が目立った。5.2 「チューターとの関係」で紹介した、Aグループの「チューターともっと会いたい」という要望とを考えると、学生たちは、チューターと現状以上の深い交流を求め、またチューター以外の日本人学生との交流も広げていきたいと考えているのではないだろうか。特に、チューター以外の日本人学生との交流の機会を増やすことが今後の課題といえる。

他の要望としては、研修コースに入っていない学生から、A1 「日本語のクラスが少ない」、B 「中上級以上の発音、聴解、文法のクラスを」という声があがった。研修コースは週9～12コマあるのに対し、学部の日本語の授業は週2コマで、後者に出席している学生にとってこうした要望は当然ともいえる。コマ数の増加は難しいが、コースデザインを工夫することでこうした要望に応じていきたいところである。

A 1 要望

- 宿舎は留学生だけが生活するのではなく日本人と混在にしてほしい(1)
- 実地見学旅行のような旅行がもっとあるとよい(1)
- 日本語のクラスが少ないので日本語力をのばせるか心配(1)
- 奨学金に関する情報がほしい(1)

A 2 要望

- 宿舎は留学生だけが生活するのではなく日本人と混在にしてほしい(1)
- 留学生と日本人が話す機会をもっとほしい(1)、○日本人との旅行がほしい(1)
- 伝統的なアクティビティに参加したい(1)
- 来日してすぐに生活上のインフォメーションがほしい(1)

B 要望 「なし」 3名

- ~~○中上級以上の発音、聴解、文法の授業がほしい(1)~~

6. まとめ

インタビューから交換留学生がどのような留学生活を送っているかを明らかにし、その回答から見えてくる留学生の意識や志向を分析してきた。最後にその述べてきたことをまとめておく。

留学生の実態は、経済や健康面で大きな問題を抱えることもなく、周囲の人々のサポートを受けながら比較的充実した生活を送っている。中でも、長期休暇を利用して旅行を計画したり大学の行事に参加するなど日本文化を直接体験することについて非常に意欲的な学生の姿がみられた。

学生の関心は、留学以前からこの日本文化の体験に寄せられている。その内容は、華道といった伝統的なものからマンガやアニメなどのサブカルチャー、さらには生活様式など多様であるが、どちらかという現代文化への興味が強いようである。こうした興味は日本について学ぶことから生じるものであろう。しかし、留学生生活を半年ほど続けていくと意識に変化がみられ、自分たちだけで日本文化を体験するのではなく、同世代の日本人学生との交流を求める声が聞かれるようになってくる。チューターとの関係も時間の経過につれて用意されていたパートナーから友達という関係に深まっていくようである。

内面の変化としては、このチューターとの関係の深まりと、留学経験が具体化していくことがあげられる。来日当初は大学案内にでも載せられているような内容が語られていたが、半年間に自分自身の体験したことが語られるようになっていくのは興味深い結果であった。

充実ぶりが見える中でいくつか問題点も見られた。一つは、日本人学生との交流が十分満足するには至っていないという点である。今以上に親しくありたいという声や、日本人学生混在の宿舎や旅行の計画を求める声も聞かれた。留学生センターでは「話そう会」や「ランチ会」など異文化交流のための活動を行っているが、体験型の文化活動においてさらに交流の場を設けていきたいところである。その際、企画の主体を、留学生センターからチューターや交換留学の希望者や経験者といった日本人学生にシフトしていくことで、学生同士の交流が進みやすくなるを考える。交流が進んできたところで留学生に企画を担当させるのも面白いだろう。留学生には、このような活動やサークルに入ってみることなど、人との交流を受け身で待つのではなく主体的に求めていくよう指導を進めていきたい。問題点の二つ目は指導教員のあり方である。指導内容は授業に限らず、教員と留学生が接する機会を作っていくことを提言してゆきたい。三つ目は、留学前の日本に関する情報収集である。情報収集は短期留学の「質」を左右しており、提携校に対して、実際の留学生生活の公開といったわかりやすい形での情報提供をすべきである。この情報をもとに提携校での事前指導や山梨大学への留学経験者との交流会のセッティングを各提携校にお願いしたいところである。

インタビューをもつことで、有意義な留学生生活を送るために何をサポートすればよいのかということに具体的な示唆を与えてくれる発言が多く得られた。本稿では主に生活面を明らかにしてきたが、こうした生活面の情報が得られたことは、交換留学生の多くが出席している日本語研修コースの運営にとっても得るところは大きく、このインタビューの意義は小さくなかったと信じている。